

保護者・教師への支援

特別支援教育講座・荻田知則

1. 授業の概観

本授業は，特別支援教育コーディネーター（SSEC），及び学校心理士としての専門性を習得するために必要な科目であり，SSEC・学校心理士として臨床・教育実践を行っていく上で必要不可欠な専門的スキルや共感的態度を学ぶことを目的とした。そのため，通常の学級に在籍している発達障がい児本人（LD，AD/HD，高機能自閉症児等），保護者，教師・学校を支援するためのコンサルティング，カウンセリング手法を習得することを目的とした。

2. 授業内容

授業スケジュールは，以下の通りであった。

- ・特別支援教育の現状
- ・相談・調整・交渉技術に関する心理学的技法
- ・保護者・教師・関連施設との連携（校内委員会を含めた支援体制の構築）
- ・知能検査等の実施に向けた助言・交渉
- ・知能検査等の現場への活用（個別の指導計画・教育支援計画立案）
- ・問題解決的ロールプレイと省察（保護者への聞き取り・実態把握と傾聴技術）
- ・問題解決的ロールプレイと省察（アセスメントの結果報告と指導計画の説明）
- ・問題解決的ロールプレイと省察（クラスメイト等との関係調整）
- ・問題解決的ロールプレイと省察（校内外における支援体制作り：校内委員会，PTA，医療機関等）

問題解決場面における知識・技能を高めるために，前半部は社会心理学の用語等を概説すると共に，相談・調整・交渉に関わる心理学的技法について講義を行った。後半部では，問題解決的ロールプレイとして，設定された課題に対して小集団（3～5人）で討議を行い，その上で役割分担をした後にロールプレイを行った。ロールプレイ後，各役割を演じた感想を全体で共有し，保護者・教師等の心的状態について共感的理解を促進するよう努めた。加えて，各グループのロールプレイを他のグループが観察しながら，感想を述べ合う機会を設け，第三者的立場から，相談・調整・交渉場面の言動や技法について省察を加えた。最終的には，都道府県教育委員会等が実施している巡回相談等において，相談員として保護者・教師に助言・指導を行う課題を設定し，ロールプレイにおいても担当教員から助言を行った。

2. 授業評価法

無記名による4段階，もしくは6段階尺度のアンケートと，記述式のアンケートを行った。各項目の結果について，図1，2に示す。

アンケートは，受講生の成績に一切影響せず，授業に対する自由な回答を保証するために，最終レポート提出後，無記名式で行われた。

3. 授業評価結果

受講者は，現職教員10名，非現職教員2名，計12名であった（特別支援教育コーディネーター専修8名，特別支援学校教育専修2名，その他2名）。12名全員から回答があった。

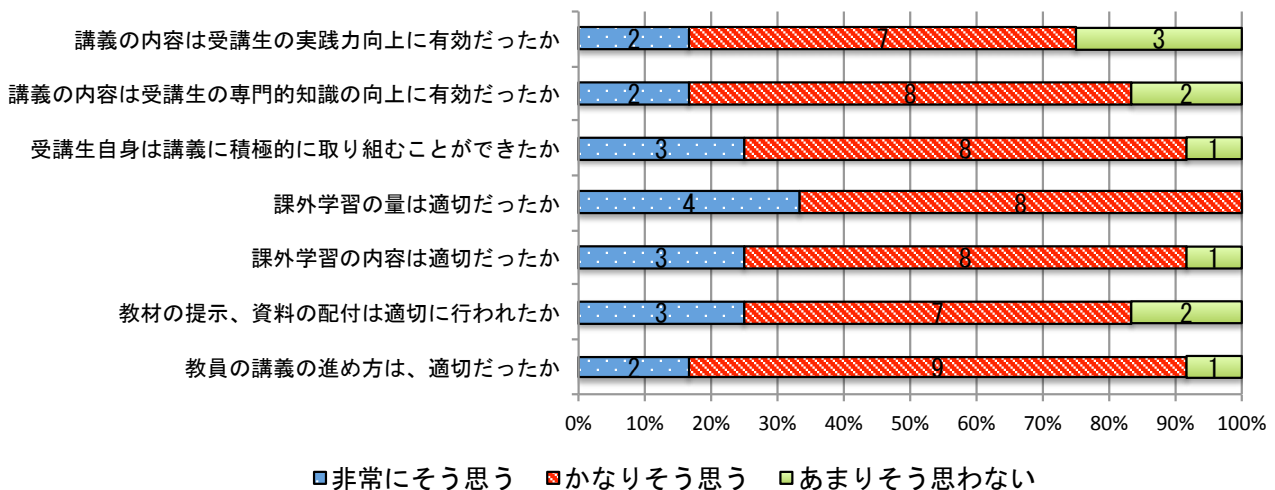


図1 授業に対する受講生の感想（4段階尺度）

3-1 授業に関する感想（図1）：図中の数値は、人数を示す。図1を見ると、全ての項目において肯定的感想が得られた。しかし、「講義の内容は受講生の実践力向上に有効だったか」の問いに対して、3名が「あまりそう思わない」と応えている。この点に関して、アンケートの最後に設けた自由記述欄に「ロールプレーが多く、実践に近いものが多かったが、反面、状況説明が少なすぎてロールプレーに意味がないものもあった」「かなり実践的な内容だったと思います。教員は現場で実践しているのでロールプレイの回数を少し減らして、制度のことやテスト（文脈から、知能検査を指すと考えられる：著者注）の内容についてもっとお話ししていただけたらよい」（両コメントとも、原文の通り）という回答があった。これらの自由記述を見ると、実践力を高める演習として、ロールプレイを評価しつつも、現職教員を中心に、特別支援教育の制度や専門的技法等に関する講義の比率を高めるよう求めていると解釈した。

本授業では、実践力を高めると同時に、他の立場（保護者等）への共感的理解を高めることを目的にロールプレイを重視しているが、ロールプレイに割く時間が長く、関連する専門的知識・技能についての時間が少なくなっていたのかもしれない。次年度に向けて、時間配分を再度検討したい。

3-2 授業の目標に対する受講生自身の理解度（図2）：ほとんどの項目で、受講生の多くが、授業の目標を達成できていると自己評価している。ただ反対に、どの項目においても数例は「どちらかというとは達していない」「あまり達してな

い」とする回答が見られる。全ての項目に「達していない」と回答した人の自由記述欄を見ると、「①保護者、教師共になんか・マイペース・うつ病になりそうなタイプ等、まず相手の見分け方、②その相手に対する話し方・おとし方、③うなずきの仕方や回数、④保護者が期待していること・教師が期待していること・管理職が期待していること、⑥説得をさせる声の大きさや調子、服装のあり方、口調、視線、態度、⑦ぜったい『うん』といわすことのできる説得法について」（原文の通りだが、数字は著者が記入）知りたいと書かれていた。前述の内容の全てが本授業に関連するものではないし、教師・学校の一方的な「命令・要請」になりかねない内容も含まれているため、こうした要望については精査が必要であるが、次年度は、より多くの受講生が目標を達成したと感ずることができるよう、授業改善に努めたい。

3-3 その他の感想：授業の内容について、自由記述式のアンケートで多くの回答を得た。どの回答も肯定的な感想であるが、次年度に向けての課題も提起された。例えば、設定された課題のような場合に担当教員だったらどのような話をするのか知りたいとの意見が3件見られた。また「ロールプレイの中でも相談技法を学べたが、教授という形でいろいろと聞きたいこともあった」「授業で得たもののストックがなく（資料）振り返りが難しい」等、講義形式での授業を望む意見もあった。担当教員のモデル提示については今年度の補講として計画するとともに、授業の形態や内容についても、次年度に向けて吟味・検討したい。

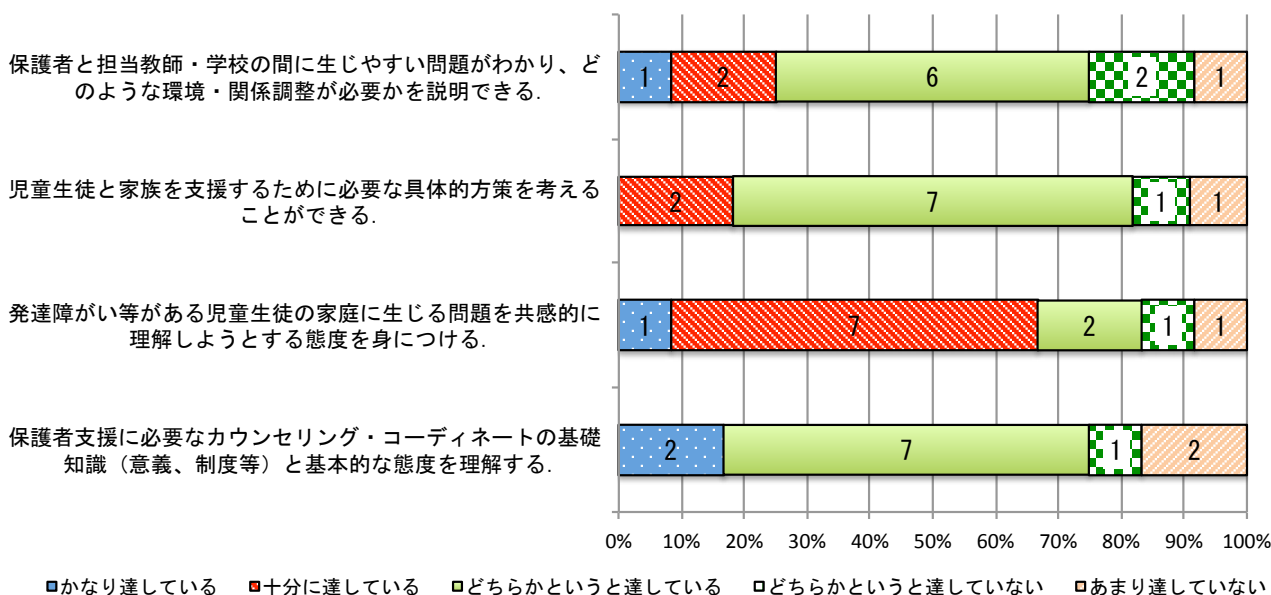


図2 授業目標への理解度に関する受講生自身の自己評価（6段階尺度）